

も廿疋三十疋の錢をとるまして水のふかき時は其賃かぎりなし、水のある時分ならば島田かなやに宿をとり川ごしのねだんをきはむべし、川ばたにゆきかゝりては殊の外に賃高し、いはんや出家町人伊勢まいりをばなをも直段たかくとる也、此川にては功者あるべし、まこと大水ならば宿に逗留すべし、然るに此ほど打續きて雨ふらず、水はさだめてすくなかるべし、今夜島田にとまりて、大河を前にかへん事しかるべきからず、もし川上に雨ふり、夜の間に水まさらばくやしからん、道はたゞ一里なり、かなやにこえてとまり給へ、草臥給はゞ馬にめせて、島田にて馬をかり、男をばうちのせ、樂阿彌はかちにて行略、_中川ばたにゆきてみれば思ひの外に水おほし、されども馬かた心得たるものにて瀬を尋ねてわたす、樂阿彌もからしりの馬はあぶなきものぞや、わきひらをみれば目のまふものぞ、目をふさぎ、よく鞍つぼにとりつき給へと、男にちからをそへて、歩意々々といふて渡るうちに、_略下

〔東行日記〕大井川

激浪翻雲巨石流、毛寒渡口一時秋、水村老弱踏如席、恍訝神明又鬼幽。

〔諸國道中袖鏡〕大井川の下にいろと云所あり、川越の肩へまたがりて越すより川越大勢かゝりてれん臺にて越もあり、水の多少によるゆゑ、川越のちんせん定らず、人壹人に付九十文以上に至れば留り川となる、御用の御状箱を渡して川あく也。

〔東海道名所圖會 四〕大井河渡口或は大堰川、又は大猪河とも書す。金谷の驛の北にあり、○中略

此大堰川は、東海道第一の急流の大河にして、薰風にはみかさをまし、穴師あなし北風吹ぬれば水落る、いにしへより、舟なく檣なく橋無うして、ゆき、の人は、島田金谷の川越所に立寄て、何文川の定めを聞いて、其賃をわたし、割符を取て、渡丁に越さしむ、蓮臺肩車かたぐるまなどの兩品ありて、交易の賈人、京登り、吾妻下り、伊勢まいり、富士詣など、八人懸の臺に乗られ、又は肩車にて涉すもあり、相撲の關